

## 購入文化財の概要

### 【絵画】

1. 紙本墨画叭々鳥図 しほんぼくがははちようず せつそんひつ 雪村筆 1幅  
天文二十四年九月四印道人の賛がある

区分：重要文化財（昭和52年6月11日指定）

種別：室町水墨画（雪舟派）

法量：縦26・0cm 横48・0cm

時代：室町時代・天文24年（1555）

棘のある木や笹に囲まれた岩上に一羽の叭々鳥を描く。「雪村」の朱文壺印があり、また円覚寺僧景初周随（?～一五五七）による天文二十四年の賛がある。年記を伴う作品のほとんど遺されていない雪村の基準作として貴重なものである。



けんぽん ぼくがびやくえかんのんず  
2. 絹本墨画白衣観音図  
平石如砥の賛がある

もくあんひつ  
黙庵筆

1 幅

区分：未指定

種別：室町水墨画（初期水墨画）

法量：縦 121・0 cm 横 48・9 cm

時代：南北朝時代

山中の崖に寄りかかるように滝を眺める白衣の観音を描いた大幅。画中に「黙庵」「靈淵」の二印があり、上部に平石如砥（一二六七～一三五七）の賛がある。入元僧・黙庵靈淵（？～一三四五）が描いて平石に賛を請うたもので、平石が寧波・天童山景德禅寺の住持を努めていた一三四〇年ころの着賛とわかる点が非常に貴重である。



## 【工芸品】

### 3. 朱漆輪花天目盆

しゅうるしりん か てんもくぼん

底裏に享徳四年，西大寺沙弥方天目盆，二之内の漆銘がある

いちめん  
一面

区分：重要文化財（平成16年6月8日指定）

種別：工芸品

法量：径49.8cm 高11.4cm 高台径42.8cm 高台高7.3cm

時代：室町時代 享徳4年（1455）

唐物漆器の影響を受けた律動的な曲線で構成される大型輪花形盆の優品である。底裏の銘文により，もとは西大寺に伝来した一对の内の一面であることが知られ，天目茶碗を置く天目盆であったことが分かる。

作行の優れた基準作であるとともに，名称や用途が分かる例としても貴重である。



【書跡・典籍】

4. 清拙正澄墨蹟 せいせつしやうちやうぼくせき 〈ひんほつしやごろうせん 乘弘謝語 (蠟牋) / けんむよねんろうげつたん 建武四年臘月旦〉 1幅

区分：重要文化財（昭和34年12月18日指定）

種別：書跡・典籍

法量：縦29・4cm 横60・0cm

時代：南北朝時代

この墨蹟は、梅樹を摺った蠟牋に「叙謝乘弘上堂」の書き出しから十七行にて書かれている。清拙正澄（大鑑禪師）が南禅寺在住の時、住持に代わって乗弘上堂した中山清闇のために書いて送った謝語である。乗弘は五頭首ひんほつちやうずの一人がこれにあたるが、この時は後堂の中山が選ばれたとある。謝語の現存する例としては一番古いものである。



5. 一山一寧墨蹟いつさんいちねいぼくせき〈阿弥陀経語あみだきょうご／正和五年七月十五日しょうわごねんしちがつじゅうごにち〉

1 幅

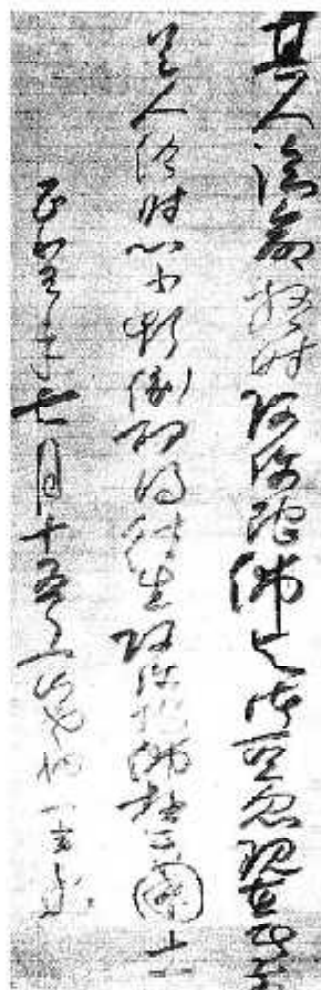
区分：重要文化財（昭和37年6月21日指定）

種別：書跡・典籍

法量：縦97・2cm 横29・5cm

時代：鎌倉時代

一山一寧は中国台州生まれの禅僧で、文永・弘安の役の後、元の使者として正安元年（一二九九）来日する。はじめ北条貞時に疑われて幽閉されるが、のちに解かれて貞時の帰依をうけ建長寺住職となる。この墨蹟は一山の示寂の前年にあたる正和五年（一三一六）、七〇歳の時のもので、竹紙に青墨を用いて縦三行に軽快なる筆致をもって阿弥陀経の一説を書いている。



# 【古文書】

## 6. 古文書手鑑 こもんじよてかがみ（ならのくちは櫛のくち葉）（五十通）

1 帖

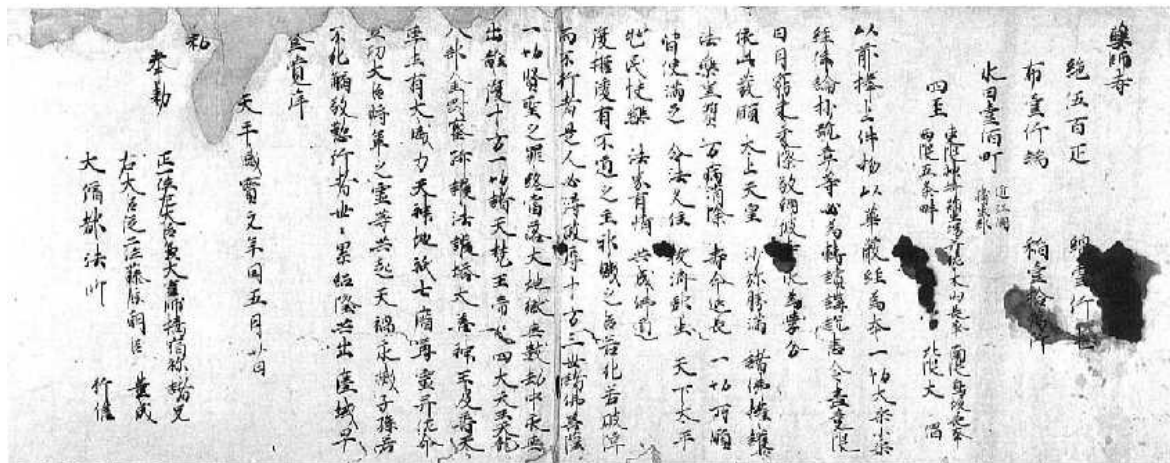
区分：重要文化財（昭和31年6月28日指定）

種別：古文書

法量：縦52.9cm 横56.5cm

時代：平安～室町時代

緞子表紙の大冊の帖に平安時代から室町時代に至る古文書が貼られている。古文書には、勅書写、繪旨写、院宣、符、牒、解、施入状、讓状などが含まれており、東大寺関係を主として、その末寺、あるいは興福寺、奈良諸寺院の史料として何れも貴重である。特に聖武天皇勅書写は、平田寺所有の国宝・聖武天皇勅書（天平感宝元年閏五月廿日）と同時に薬師寺に賜ったものの古写として重要な史料である。





## 【工芸技術資料】

### 7. <sup>たてにしき</sup>経錦 <sup>しょうよう</sup>松陽

1点

作者：<sup>きたむら</sup>北村 <sup>たけし</sup>武資（重要無形文化財「羅」，「経錦」（各個認定）保持者）

制作年：平成30年（2018年）

法量：幅71.0cm，天地500.0cm

備考：工芸技術記録映画対象作品

経錦は、2種類<sup>ぬきいと おもぬき かげぬき</sup>の緯糸（母緯と陰緯）によって、<sup>たていと</sup>経糸を浮き沈みさせて文様を織り出した錦である。中国の前漢には既に完成され、日本では法隆寺や正倉院伝世の遺品が残るが、奈良時代以降、次第に衰退していった。

作者はこの経錦を復元し、さらにそこに現代の染織家らしい色彩や意匠感覚を付与して新たな命を吹き込んだ。本作では、伝統的な吉祥文様の松が大胆に抽象化され、繁茂する若松の生命力が芯から放射状に伸びる細長い三角形によって表されている。

特筆すべきは、経糸の密度の高さである。8000本という数の経糸を駆使し、極めて細い絹糸を用いて、しなやかさを生み出している。

本作は、織物の可能性を追求し続けた作者の技量が遺憾なく発揮された作品である。平成29年度工芸技術記録映画の対象作品。



8. しばりぞめほうもんぎ 絞染訪問着 「りよくえい あと 緑影の迹」

1 点

作者：おぐら あつし 小倉 淳史

制作年：平成30年（2018年）

法量：丈180.0cm，衿68.0cm

備考：第65回日本伝統工芸展 文部科学大臣賞 受賞作品

作品名は、早朝遭遇した川岸の竹藪の影とその隙間から差し込む光に由来する。色の帯の部分は、「りんだ輸出し絞り」で染め出されている。これに縫いしめ絞りや帽子絞りを併用してアクセントを加えている。上前の薄い緑は2度，背中心から下前の濃い緑は3度にわたって輸出し絞りを繰り返す，微妙な色の調子の変化による効果を生み出している。細い線は、「けんすけ建亮絞り」によって表現されている。

入念な計算に基づく染め分けと，細心の注意を払った構図によって，本作では，上前が淡い色に，背から下前側が深い色を帯びている。その大胆な構成は，縮緬生地の白さを一層表情豊かなものにしている。

本作には伝統的な染色技法を守ると同時に，絞りの表現の探求と技術の深化を続ける作者の姿勢が遺憾なく発揮されている。第65回日本伝統工芸展の文部科学大臣賞受賞作品。





9. ぎんうちだし か き ずいうん  
銀打出花器「瑞雲」

1点

作者：おおすみ ゆきえ 大角 幸枝（重要無形文化財「鍛金」（各個認定）保持者）

制作年：平成30年（2018年）

法量：奥行25.6cm，幅46.0cm，高22.5cm

備考：平成29年度工芸技術記録映画対象作品

厚さ2.5ミリの銀板を円形に切り出し，ガスバーナーで焼きなまししながら金鎚，木槌で叩いて打ち出し，器を造形した。更に器の内部に松脂を詰め，外側から金鎚を用いて，波線状の鎚様を打ち出した。更にその表面を，金箔と鉛箔を用いたぬのめぞうがんで装飾し，花器を完成させた。

作者はこれまで，波や風，大気の流れなどの自然の中の流動的な美を創作のモチーフにしてきたが，今回は，東洋美術の中で描かれてきた雲文様をテーマに意匠を考案した。器の表面には一面に鎚目が残され，その上に，筆で描いたような勢いある線で（金箔）と灰色（鉛箔）で雲文が描かれている。素材の美しさが量感あふれる形に活かされた良作であり，作者の鍛金及び，彫金（布目象嵌）の高度な技量が認められる。

重要無形文化財「鍛金」保持者の作品であり，また，平成29年度工芸技術記録映画の対象作品である。（写真：毎日映画社提供）



10. 友禅着物「葛の雨」

1点

作者：二塚 長生（重要無形文化財「友禅」（各個認定）保持者）

制作年：平成29年（2017年）

法量：丈172.5cm，衿65.5cm

備考：平成28度工芸技術記録映画対象作品

糊置きという友禅の防染技法を用いて、雨に濡れる葛とその間で羽を休める 尾長を表した着物。背面の左半身には、紺の地色に雨の合間から葛の葉がのぞく様子を、右半身には、青緑の地色に花をつけた葛が小雨に負けず葉をのばす様子を、肩身替わりで描いている。

作者は、糸目糊置きと呼ばれる、線状に糊を置き、白い線を染め残す技法により、滝や波、大気といった自然界の動きや現象を表現することを得意とする。本作は、こうした技量が遺憾なく発揮されていると同時に、これまでの抽象的な表現に加え、葛や尾長の具象的な描写を取り入れた意欲作として重要である。

重要無形文化財「友禅」保持者の作品であり、また、平成28年度工芸技術記録映画の対象作品である。



1 1.	<small>せきしゅうばんし</small> 石州半紙	<small>まれ</small> 稀	1 締
1 2.	<small>せきしゅうばんし</small> 石州半紙	<small>つる</small> 鶴	1 締
1 3.	<small>せきしゅうばんしよ</small> 石州半紙	<small>ばん</small> 四ツ判	1 0 0 枚
1 4.	<small>せきしゅうばんしよ</small> 石州半紙	<small>ばん</small> 四ツ判	1 0 0 枚
1 5.	<small>せきしゅうばんし</small> 石州半紙	<small>にさんばん</small> 二三判	1 0 0 枚
		<small>まれ</small> 稀	

作者：せきしゅうばんしぎじゅつしゃかい 石州半紙技術者会（重要無形文化財「石州半紙」保持団体）

制作年：平成30年（2018年）

法量：1 1. 25.0 × 35.0 cm

1 2. 25.0 × 35.0 cm

1 3. 54.0 × 75.0 cm

1 4. 54.0 × 75.0 cm

1 5. 63.0 × 100.0 cm

石州半紙は津和野、浜田の両藩で発達した半紙の総称またその製作技術である。  
 地元産の石州楮<sup>せきしゅうこうぞ</sup>を原料とし、楮の処理工程において緑色の甘皮部分を残すことに大きな特色がある。また、紙漉き<sup>かみす</sup>は激しく水を動かす縦揺りで、繊維を十分に絡み合わせる。こうした製作上の特質の結果、紙質は極めて強靱となる。

番号1 1・1 3・1 5の「稀」と番号1 2・1 4の「鶴」は工程にかける手間の差を表すもので、「稀」原料の処理により手間をかけた最高品質のもので、乾燥も板干しであることが多い。また、紙を漉く際の寸法は、明治期までは半紙2枚取り（最後に裁断する）であったが、大正時代からは4枚取りとなり、近年では8枚取りが多い。番号1 3・1 4、こうして漉いた四ツ判（四枚取り）であり、裁断して半紙（番号1 1・1 2）とする。二三判は、近代以降、大判の和紙を漉くようになり全国的に最も普及している2尺×3尺強の大ききで漉く和紙であり、近年の石州半紙の製作状況を示す資料と言える。

重要無形文化財「石州半紙」保持団体の技術見本として、また伝承者養成事業等の参考となる優秀作品として貴重である。

## 【アイヌ文化関係資料】

### 16. アイヌ文化関係民族資料

アイヌの生活用具等 計19件

区分：未指定

時代：19～20 世紀

個人の大型コレクションや古美術商を通じて収集した資料である。収集資料には、アイヌ文化を表現するのに適した高い展示効果を持つ染織品や木彫が含まれている。これらの特徴的な模様は研究対象としても興味深く、アイヌ文化の変遷に大いに寄与する資料群であると言える。

煙草入れのことを、アイヌ語でタンパクオプ（タンパク：煙草，オ：～を入れる，プ：もの）などと呼ぶ。煙草や煙管を持ち運ぶための道具である。筒状の容器（あるいは布製の袋）に煙草を入れ、篋状（あるいは棒状）の煙管差しに、煙管をはめ込む。こうして、煙草と煙管を携行する。

印籠のような形をした容器は木製で、胴体と上蓋を組み合わせて作られている。容器と篋状の煙管差しを結びつけている紐は、組紐である。緒締は木製で、ガラス玉や鹿角を用いているものもある。本資料には煙管は付属していない。アイヌ民族も昔は、自分の使う道具は手づから作り、思い思いに美しい模様を施した。煙草入れ、煙管差し、緒締の部分に、そうした模様が彫られている。



タンパクオプ（煙草入れ）

## 【アイヌ文化関係資料】

### 17. アイヌ文化関係文書資料

知里真志保の遺稿及び関連資料 計2件

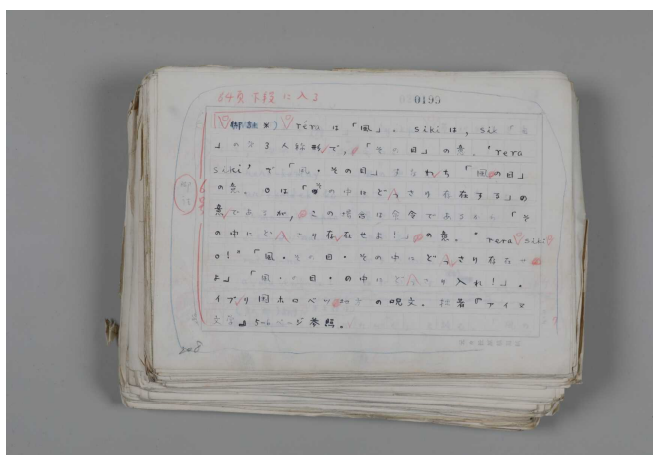
区分：未指定

時代：19～20世紀

本件は知里真志保の遺稿及び関連資料である。知里真志保（1909（明治42）年2月24日～1961（昭和36）年6月9日）は、アイヌ民族の視点からアイヌ語を理論的に研究するなどアイヌ研究における功績がある人物である。本資料はアイヌ語の基礎を築いた故人の一級品の資料であり、中でもアイヌ文化の調査結果をまとめた自筆のノートや原稿、親類との手紙、北海道アイヌ協会の資料などは当時の故人の活動や生活の様子を知ることができることから非常に貴重な資料と言える。

「アイヌ語入門：とくに地名研究者のために」1956年に出版された知里真志保の自筆原稿。この本はアイヌ語の音韻や文法について詳細に述べたものであり、研究上重要な指摘も行われている。自筆原稿であることから資料としての価値も極めて高い。

「アイヌ民族甦生援護ニ関スル嘆願」占領下の日本でGHQ幹部と北海道アイヌ協会の代表者が面会し、アイヌ民族への支援を要請したことが知られており、これはその下書きや写しといった関連資料と思われる。当時、北海道アイヌ協会の創設に尽力し理事に就任した知里真志保がこれらの請願書に係わっていたことから、本件の一連の資料として含まれていたことが考えられる。アイヌ史の中にあってアジア・太平洋戦争後の貴重な文書資料である。



左 知里真志保著『アイヌ語入門：とくに地名研究者のために』の自筆原稿

右 アイヌ民族甦生援護ニ関スル嘆願



## 【アイヌ文化関係資料】

### 18. アイヌ文化関係美術資料

アイヌ風俗画等 計2件

区分：未指定

時代：19世紀

幕末から明治期にかけて、和人がアイヌの風俗を描いた絵画は、当時のアイヌの生活文化を知る手がかりとして、民族誌の観点から高く評価される。

「紙本著色 アイヌ風俗画 六曲屏風」は、アイヌの生活から、馬の放牧、子熊捕り、鯨干し、昆布採り、ラッコ猟、酒宴の六場面を画題として取り上げ、制作したものである。作者の早坂文嶺（1797－1867）は、弘化年間（1844－48）頃に山形から現在の北海道松前に移り住んだ絵師で、実際にアイヌの生活を見聞し、アイヌ語で長者や旦那を意味する「ニシパ（二司馬）」という号を用いる。本作では、「蝦夷嶋 遮儂（シャモ：アイヌ語で和人を意味する） 文嶺絵」と署名しており、文嶺がアイヌ語を耳にし、用いていたことがうかがい知れる。

「紙本著色 アイヌ社頭 一幅」は、秋田の日本画家平福穂庵（1844－90）の作。平福穂庵も、明治初めから北海道浦河や函館を訪れ、函館に3年ほど滞在している。本作は、函館の絵馬屋平沢屏山（1822－76）が明治初期に制作したアイヌ風俗画をもとに、滞在中に実見したアイヌの生活や民具などの情報を加え、再構成して制作したものと考えられる。明治期のアイヌ絵の需要や絵師たちの交流などを示す資料としても興味深い。



アイヌ風俗画



アイヌ社頭